



これからの学校づくり検討委員会 【記録集】

(案)



室蘭市
開港150年・市制施行100年



Muroran
～まち・ひと・みなとつながりが未来を創る～

目 次

1. 第3回検討委員会振返り資料	P 1
2. 第4回検討委員会振返り資料	
1) A班+B班+C班から抜粋	P 3
2) A班	P 7
3) B班	P 9
4) C班	P 11
3. 第5回検討委員会振返り資料	
1) A班+B班+C班 キーワードのみ	P 13
2) A班+B班+C班	P 15
4. 第7回検討委員会振返り資料	
A班+B班+C班	P 23



1. 第3回検討委員会振返り資料

テーマ① 「自分にはよいところがある」と回答する子どもが少ない

<主な意見>

1. 「級友・自分」

- ・親や先生の多忙化で子どもが褒められたり、認められたりする機会が減少した
(結果、自分の良いところに気づきにくい環境となってしまった)
 - 親やまわりの大人が子ども達を認める、褒めることが大切
 - 家庭、学校、地域が同じ方向を向いて子ども達の体験の機会を創出することも重要
- ・子ども同士の社会が希薄化しており、互いに褒め合う機会が減少した
 - 良いところを互いに褒め合う、認め合う場面を作る

2. 「先生・学校」

- ・行事、各種活動、体験、経験の不足
 - 子どもが活躍できる場、自信を持てる機会を作る
 - 地域行事の復活
- ・先生、親等の子どもへの過干渉
 - 子ども同士で解決する機会を作る
 - 子どもを信じる
- ・親から勉強しろ、或いは学校で勉強や運動ができる子が評価されがち
 - 点数化されにくいところも評価してあげる
- ・皆同じことを同じように、という教育場面が多い
 - 自分の考えや思いを伝える授業を設ける

3. 「家庭・地域」

- ・親が多忙で子どもとコミュニケーションをとる機会が少ない
- ・親が多忙で子どもを褒めたり、認める機会が減少した
- ・親が多忙で子どもの話を充分聞けない環境
- ・スマホの使用時間増により家庭内でのコミュニケーション時間の減少
 - 時間が無い中でもとにかくたくさん会話できるようにする
 - 学校での勉強、どんなことをしているか聞く
 - 地域が親をサポートする
- ・将来の夢を持ってない(目標がない)
 - 将来について一緒に話し、関心を示す

テーマ② ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない

<主な意見>

- ・室蘭の良さに気づいていない。本では勉強しているが体験・経験がない
- ・町内会の加入率も減っている
 - 次につながる活動を増やし、地域の一員である自覚を芽生えさせることが重要
- ・親が室蘭を知らない
- ・工業都市であるため、愛着を持つ子が少ないのは仕方ないのでは
- ・室蘭の良さを知る機会がない
 - 学校等で良さを教えていく
 - ロボットサッカー等、室蘭の良い点が増えるように助長していく
- ・子どもが遊べる施設・何度でも行きたくなる施設・図書館にスターバックス等を等、「ここ」という推しがない
- ・病院・景観・千歳が近い等室蘭の良さはあるが、親世代がわかっていない
- ・以前はサッカーのイメージが強かったが、街をあげて押し出せるものがなくなった
- ・子どもにとって公共交通機関が不便だ
 - 街をあげて押し出せるものはないが、人の温かさを感じる街をつくることで、子どもが魅力を感じるのでは
 - 自分らも他地域の方達に言われて気づく魅力もあるので、そういう意見を大事にしていきたい

2. 第4回検討委員会振返り資料

1) A班+B班+C班から抜粋

テーマ① 不登校について

キーワード：今と昔の様々な相違（ゲーム等）、不登校の予防と現実対応、トラブルと耐性

【課題】

1. 仲間、放課後

→人間関係が作れない

- 地域で遊ぶ相手がいない
- 人間関係形成、異年齢交流ができていない
- 人間関係を作れない
(統合により地域に子どもが集まりにくい。コロナで集って遊ぶと苦情)

2. 家庭、環境変化

→ゲームがあるので不登校でも困らない

- 困り感が薄い（ゲームで繋がれるので）
- 今はネット社会で家にいても楽しい、対面で得られるメリットよりデメリットが多い
- 子どもの様子が劇的に変化したのがゲーム（ファミコン）の存在。昔は家にいてもつまらなかった
- ゲーム等による生活習慣の乱れ
- 親子で向き合う時間が不足している（スマホ、家庭のルール等）
- スクール児童館で遊ぶよりも、家にある楽しいゲームがたくさんあるので、引きこもりがち

3. 学校、先生

→学力の低下、学校がつまらない、辛い

- 先生が生徒の人間関係に目が行き届いていない
- 昔は子どもの役割を先生が振ることができたが、今はできない（あの子の面倒見てあげてとか）
- 先生の尊厳が低下している（デリケートな問題への対応）
- 学力の低下（勉強ができるようになると、学校へ行くのが楽しくなるのでは）
- 不登校原因の場合分け（行きたいけど行けない or 行きたくないから行かない）
- 学校がつまらない、学校へ行くのが辛い

○共働きにより母親の目が子どもに行き届かない

4. その他

→先回り、トラブル回避、耐性低下

- 個が過度に尊重されていることで、子どもたちの耐性が弱くなっている。又、周りが優しすぎることも原因か（課題解決能力の低下）
- トラブル慣れしてないので、トラブルが起きると無気力になり不登校へ（そういう子は親の愛情が不足しているように感じる）
- 理不尽な経験ができない。なんでも肯定されたり、集団の同調圧力が強くて馴染めない子がおり、無気力に

5. 新たな視点

→学校へ行かないことを肯定的にとらえる

- そもそも不登校でも良いのでは
- 最近の引きこもりは、家から出ないがネットや SNS で社会との接点を持っているため昔よりは良い



【解決】

→居場所、学校を面白く、道徳学習の強化

- 子どもが放課後などに集まれる場所をつかってあげる（例えばスクールバスを増便）
- 学校の方が面白い、楽しい場所とする
- 家庭の問題も包括的にサポートできる施設活用も解決には必要
- 学校が人間づくりをサポート
- 学校に行けなくても新しい居場所があると良い
- 学校に行きたくなくなるような環境づくりが大事（集団生活で揉まれることで力つく）
- 小学校でも教科担任制が導入され、担任と教科担任、複数の目で子供を見られる
- 人として大切なものを学ぶ環境を作る（道徳学習の強化）

テーマ② いじめについて

キーワード：子どもは大人の鏡～道徳心が何より大事～、いじめといじり、いじめに対応する正しい知識などを身につけさせる、トライ&エラー

【課題】

1. 予防教育

→いじめにならないため、道徳心等をしっかり教育する

- 何がいじめかわからない。悪いと思っていない子が多い。具体的に「何が悪いのか」を伝える必要がある
- 道徳心、相手を思いやる心、約束・時間を守る生活習慣を身につけさせることが重要
- 人間は本能的にヒエラルキーをつけるもの、いじめにならないよう正しい知識を身につけることが必要

2. 対処に対する教育

→当事者同士での解決。或いは逃げ場があることを教える

- いじめはなくなる。大人は逃げ場あるが、子どもは繋がりが少ないので逃げる場所がない
- リーダー研修で当事者同士の解決が重要だと感じた
- 今は子どもに失敗させない教育となってしまうため、トライ&エラーの経験が不足している（失敗を重ねて成長する）

3. 大人の影響、メディア等外的要因

→大人の道徳心、メディアのいじり暴力の子どもへの影響

- 子どもはすべて大人の鏡。メディアのいじりや暴力をまねてしまう
- 教員含め、大人のいじりが子どものいじめを助長させてないか
- 意識の低い大人の態度などが、子供へ悪影響を及ぼす。子どもは大人の縮図。
- 親の担任いじめを見た子どもが負の連鎖を引き起こす

4. その他

→同調圧力

- みんな一緒、そこから外れる言動等は攻撃される。良くて悪くても（部活勝利至上主義の話）
- 学校統廃合による地域文化の相違からいじめが発生する場合も



解決

→大人の道徳心、小中高の連携、多様な意見の尊重、子どもにトライさせる（大人は見守り）、褒めること、人の意見も肯定してみる

- 大人が襟を正す（子供は、強い人、弱い人、悪い人などを見ている）
TVなどで大人がいじったり、いじめたりする姿が普通に放送している。
又、親が教師の悪口をいうことで、それを見たり聞いたりした子ども達がそれが普通だ
とってしまう。
- イジメは無くならない、逃げる方法教える。
- アンケートでしか、SOSを発信できなというのは、相談の場があっても行けない。複
数の目で、体制で対応が必要（不登校になっても自殺は絶対ダメ）
- 大人が手本となって学んでもらう。家庭、学校、地域一体で
- 教育委員会での自殺防止を図る
- 多様な意見を尊重する（同調圧力）
- 友人等との繋がりが希薄で、自己肯定感の涵養が図られない
- ケンカできない（ケンカ後に仲直りするなどの経験が積めない）
- 学校が安全ではない
- 大人の道徳の授業が必要では（いじめを受けた経験のある人の話を聞くなど）
- 上級生や大人と一緒に解決していく。又、解決力を身につけさせる
- 理想は、子ども達に全てを任せ、大人は自殺は避けるようフォロー体制をとり、アンテ
ナを張る。
- ガキ大将の存在
- 携帯やSNSの使い方を大人が教える
- SNSの悪口とあるが、陰口なんかは昔からある。要は大人の道徳心が大事なのだ
- 物事に対して、適性のない人は一定数いる。問題は、これに対して、否定するのは簡単
だが、まずは肯定するよう助言している、実は、あれはできる、これができるといった
もって行き方をするとみんな悪い気はしない。又、生産性も向上しており効果があるよ
うだ。周りがそういった人を受け入れる寛容性も大事。
- まず褒めることが大事で、「あずましい」環境づくり。道徳心の育成が一番重要だ。
又、小中高の連携も必要
- 人の受け取り方は千差万別なので、複数人での会話時に、周りの人がこう捉えているか
もしれないとの助言が大事だ。

2) A班

テーマ① 不登校について

課題

1. 仲間、放課後

- 地域で遊ぶ相手がいない
- みんなで何かするということがない、公園に人がいない
- 人間関係形成、異年齢交流ができていない
- 親しい人にはなかなか悩みを打ち明けられない（が、異年齢ならできそう）
- 昔は通学時に近所の子を誘い合って登校していたが、最近は一人が多い

2. 家庭、環境変化

- 人間関係形成能力が減退（ゲーム）し、異年齢交流がなくなった
- 困り感が薄い（ゲームで繋がれるので）
- 今はネット社会で家にいても楽しい、対面で得られるメリットよりデメリットが多い
- 子どもの様子が劇的に変化したのがゲーム（ファミコン）の存在。昔は家にいてもつまらなかった
- ゲーム等による生活習慣の乱れ

3. 学校、先生

- 先生が生徒の人間関係に目が行き届いていない
- 昔は子どもの役割を先生が振ることができたが、今はできない（あの子の面倒見てあげてとか）



解決

- 子どもが放課後などに集まれる場所をつくってあげる（例えばスクールバスを増便）
- 学校の方が面白い、楽しい場所とする

テーマ② いじめについて

課題

- いじめはなくなる。大人は逃げ場あるが、子どもは繋がりが少ないので逃げる場所がない
- みんな一緒、そこから外れる言動等は攻撃される。良くても悪くても（部活勝利至上主義の話）



解決

- 大人が襟を正す（子供は、強い人、弱い人、悪い人などを見ている）
TVなどで大人がいじったり、いじめたりする姿が普通に放送している。
又、親が教師の悪口をいうことで、それを見たり聞いたりした子ども達がそれが普通だと思ってしまう。
- イジメは無くなる、逃げる方法教える。
- アンケートでしか、SOSを発信できなということは、相談の場があっても行けない。複数の目で、体制で対応が必要（不登校になっても自殺は絶対ダメ）
- 大人が手本となって学んでもらう。家庭、学校、地域一体で
- 教育委員会での自殺防止を図る
- 多様な意見を尊重する（同調圧力）
- 友人等との繋がりが希薄で、自己肯定感の涵養が図られない
- ケンカできない（ケンカ後に仲直りするなどの経験が積めない）
- 学校が安全ではない
- 大人の道徳の授業が必要では（いじめを受けた経験のある人の話を聞くなど）

2) B班

テーマ① 不登校について

課題

1. 仲間、放課後

- 人間関係を作れない(統合により地域に子どもが集まりにくい。コロナで集って遊ぶと苦情)

2. 家庭、環境変化

- 親子で向き合う時間が不足している(スマホ、家庭のルール等)

3. 学校、先生

- 先生の尊厳が低下している(デリケートな問題への対応)
- 学力の低下(勉強ができるようになると、学校へ行くのが楽しくなるのでは)
- 不登校原因の場合分け(行きたいけど行けない or 行きたくないから行かない)
- 学校がつまらない、学校へ行くのが辛い

4. その他

- 個が過度に尊重されていることで、子どもたちの耐性が弱くなっている。又、周りが優しすぎることも原因か(課題解決能力の低下)

5. 新たな視点

- そもそも不登校でも良いのでは



解決

- 家庭の問題も包括的にサポートできる施設活用も解決には必要
- 学校が人間づくりをサポート
- 学校に行けなくても新しい居場所があると良い

テーマ② いじめについて

課題

- 子どもはすべて大人の鏡。メディアのいじりや暴力をまねてしまう
- 女子のいじめの複雑さ
- 今は子どもに失敗させない教育となってしまうため、トライ&エラーの経験が不足している（失敗を重ねて成長する）
- 何がいじめかわからない。悪いと思っていない子が多い。具体的に「何が悪いのか」を伝える必要がある
- 教員含め、大人のいじりが子どものいじめを助長させてないか
- 先生と子ども達がお互い信頼していない



解決

- 上級生や大人と一緒に解決していく。又、解決力を身につけさせる
- 理想は、子ども達に全てを任せ、大人は自殺は避けるようフォロー体制をとり、アンテナを張る。
- ガキ大将の存在
- 携帯や SNS の使い方を大人が教える
- SNS の悪口とあるが、陰口なんかは昔からある。要は大人の道徳心が大事なのだ

3) C班

テーマ① 不登校について

課題

1. 仲間、放課後

- 昔は通学時に近所の子を誘い合って登校していたが、最近は一人が多い。

2. 家庭、環境変化

- スクール児童館で遊ぶよりも、家にある楽しいゲームがたくさんあるので、引きこもりがち
- 共働きにより母親の目が子どもに行き届かない

3. 学校、先生

- 学習面以外の評価、人として良いところ、道徳心を評価することが特に重要
人としてのコミュニケーション、心構えなど、人としての有様をもっと教育して評価すべき。社会は視覚障害、聴覚障害者のことをもっと理解してほしい
- 無気力な子どもには肯定的（キラキラ）な言葉が届きづらい（家庭背景あり）

4. その他

- 子ども達が将来に展望を見出せない
- トラブル慣れしてないので、トラブルが起きると無気力になり不登校へ
（そういう子は親の愛情が不足しているように感じる）※B班の耐性と共通項あり
- 理不尽な経験ができない。なんでも肯定されたり、集団の同調圧力が強くて馴染めない子がおり、無気力に。
- インターフェイスの多様化や小学校での教科担任制により原因がわかりにくくなって
いる。又、問題を誰に繋げていくかも大事

5. 新たな視点

- 最近の引きこもりは、家から出ないがネットやSNSで社会との接点を持っているため
昔よりは良い



解決

- 学校に行きたくなるような環境づくりが大事（集団生活で揉まれることで力つく）
- 小学校でも教科担任制が導入され、担任と教科担任、複数の目で子供を見られる。
- 人として大切なものを学ぶ環境を作る（道徳学習の強化）

テーマ② いじめについて

課題

- 人間は本能的にヒエラルキーをつけるもの、いじめにならないよう正しい知識を身につけることが必要
- 意識の低い大人の態度などが、子供へ悪影響を及ぼす。子どもは大人の縮図。
- 道徳心、相手を思いやる心、約束・時間を守る生活習慣を身につけさせることが重要
- 親の担任いじめを見た子どもが負の連鎖を引き起こす
- リーダー研修で当事者同士の解決が重要だと感じた
- 学校統廃合による地域文化の相違からいじめが発生する場合も



解決

- 物事に対して、適正のない人は一定数いる。問題は、これに対して、否定するのは簡単だが、まずは肯定するよう助言している、実は、あれはできる、これができるといったもって行き方をするとみんな悪い気はしない。又、生産性も向上しており効果があるようだ。周りがそういった人を受け入れる寛容性も大事。
- まず褒めることが大事で、「あずましい」環境づくり。道徳心の育成が一番重要だ。又、小中高の連携も必要
- 人の受け取り方は千差万別なので、複数人での会話時に、周りの人がこう捉えているかもしれないとの助言が大事だ。

3. 第5回検討委員会振返り

1) A班+B班+C班 キーワードのみ

テーマ① 「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない

1. 家庭：役割、核家族化（他人のことを考える機会少ない）、目標設定、褒める、達成感、家族団らん（の時間減少）
2. 学校：小中の連携、異年齢集団、学力や運動能力だけで評価しない学校、教科担任制の充実、小学校、中学校の良さを共有（高学年が低学年に対し規範と慣れる環境作り）、達成感を味わう授業、教員の増員（ゆとり）
3. 地域：地域の行事、地域と学校の連携、社会性を身につける、町会が学校へ、「町会」・「個」・「学校」が一体となる、コミュニティの連携、「分団」の存在（上級生が下級生の面倒を見ていた）、地域における自分の役割、地域が自信を持つ場、地域で褒められる経験も大切、子ども会の存在（小1から高3まで）、学校で評価されない子を地域（子ども会等）で補完、世代間交流、スクール児童館に教員がきて子どもを見てもらい情報共有
4. 全般：目標、認められる経験の積み重ねが大事、夢を持つ子が少ない、夢を持つことが重要、役割を与えると自分の存在感を感じられる（大沼岳陽学校の4-3-2制の例）、コミュにてースクールの効果的活用

テーマ② ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない

1. 家庭：外遊び、一家団らん
2. 学校：小中が連携して15歳の目指す姿を小中の先生が同じベクトルを向く、小中が一体となりふるさとむろらんへの愛着と誇りを持つ15歳を育成できる小中学校、小中で「むろらん学」を開設
3. 地域：スクールバスで昔話、地元企業の方が授業、世代間交流、あいさつ、地域の方が学校に入る、体験学習を増やす、地域や企業見学機会の増、コミュニティスクールの早期立ち上げと学校との連携、カルチャーナイト、授業に地域の方を介入させる、子どもたちに地域で良い思い出を作らせ、郷土愛を育む
4. 全般：市外へ出た人がむろらんの良さを言葉で発信してほしい

テーマ③ 不登校児童生徒数が、全国に比べて多い

1. 家庭：親の相談場所、親へのサポート、多様性を認める、オンラインによる教育、子どもに夢を持たせる
2. 学校：異学年授業交流、小中協力体制、専門性の高い先生を配置、小学校で専門性の高い先生の授業を、小学校で担任以外も子どもたちを見られる環境構築、サポセンくじらんの役割大事

勉強以外の体験の機会、色々な選択肢を与えられる学校、色々な選択肢を与えられる学校、インクルーシブ教育（お金とマンパワー）、たくさんのもで子どもたちを見守り手をかける、中学校の先生がもっと小学校に入る

3. 地域：叱ることができる社会、町会で保護者の悩み相談（学校や町会館で）、地域での不登校児童生徒の情報共有、あいさつが重要、地域とのつながりで救われる家族もある
4. 全般：企業訪問（社会を知る、学校以外の選択肢の認知）、いろいろなコミュニティや活躍できる場の創出、学校の負担軽減、不登校の追跡調査、多様性、不登校に対する価値観を変える、ネット環境の活用

テーマ④ いじめの発生が、今も続いている

1. 家庭：学校と連携し SNS の使い方に目を配る、メディアとの接し方
2. 学校：先生が多く先生が目が行き届いた学校、上級生の見守り、異学年が相談に乗る、意見の相違を認めるような授業、小中の先生たちの交流
3. 地域：コミュニティースクールを土台として学校と連携して登下校時や公園で子どもたちを見守る、地域の中で幼児期から様々な集団で生活する経験
4. 全般：あいさつを教える、色々なコミュニティや活躍できる場の創出

2) A班+B班+C班

テーマ① 「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない

→キーワード：

1. 家庭：役割、核家族化（他人のことを考える機会少ない）、目標設定、褒める、達成感、家族団らん（の時間減少）
2. 学校：小中の連携、異年齢集団、学力や運動能力だけで評価しない学校、教科担任制の充実、小学校、中学校の良さを共有（高学年が低学年に対し規範と慣れる環境作り）、達成感を味わう授業、教員の増員（ゆとり）
3. 地域：地域の行事、地域と学校の連携、社会性を身につける、町会が学校へ、「町会」・「個」・「学校」が一体となる、コミュニティの連携、「分団」の存在（上級生が下級生の面倒を見ていた）、地域における自分の役割、地域が自信を持つ場、地域で褒められる経験も大切、子ども会の存在（小1から高3まで）、学校で評価されない子を地域（子ども会等）で補完、世代間交流、スクール児童館に教員がきて子どもを見てもらい情報共有
4. 全般：目標、認められる経験の積み重ねが大事、夢を持つ子が少ない、夢を持つことが重要、役割を与えると自分の存在感を感じられる（大沼岳陽学校の4-3-2制の例）、コミュニティースクールの効果的活用

【課題】・【解決策】

1. 家庭

- 学校と連携し意識的に役割を与える。
- 核家族化（個）により、地域と関わる機会が少ない。他人のことを考える機会が少ない。
- 家庭では日常的な目標を決めて褒める。ただ褒めるだけでは難しい。
- 達成感を子どもたちに味わってもらう。
- 核家族化が進み、祖父母からの良い伝統や良い言い伝えを得られないため、知識や優しさが減少している気がする。
- 家族団らんの時間が少なくなっている。その顕著な例として、父親が家族団らんタイムにいないことが多いため野球のナイター中継が減少している。一緒にテレビを見なくても団らんのための時間を作っていくのが良い。
- 最近個人主義が強いため、近所の家族構成が分からないことが多い。そのため、あまり近所とのコミュニケーションの場がない。アプローチの仕方も難しい。自分みたいなおじさんが道をこどもに聞いても、不審者扱いされることが多い。
- 知・徳・体のバランスが重要。個性のぶつかりが最近では少なくなった。一家団らんの時間も減ったが、父がいなくても家庭のルールを作って対処できるはず。

2. 学校

- 小学生と中学生と一緒に清掃等の活動ができる学校。
- 毎日の授業づくりを、小中の良さを出し合い、話し合える学校
- 小中の先生方がお互い交流できる学校
- 縦割り、異年齢集団のある環境
- 若い先生向けの YouTube の研修動画
- 学力、運動能力だけで評価されない学校。家庭が前提
- 魅力ある授業をするため教科担任制の充実を図る
- 小学校、中学校の良さを共有し「低学年は高学年にあこがれを抱き」「高学年は低学年に対し模範となれる」ような環境を作っていく。
- 「わかった」「できた」を実感できる、達成感を味わわせる授業。役に立っていると思える学校生活が大切
⇒「わかった」「できた」と思っても現状は最後にテストが待っている。別の良さを探して子どもにフィードバックする。
- 子どもたちも年齢が上がると、大人に褒められることより周囲の友人にどう思われるかが重要となってくる。
- 先生はこどもとの言葉のキャッチボールが必要だと思う。しかし先生に余裕がないので難しいと思う。先生を増やすとかして、子どもをみる時間を増やして欲しい。
- 自己有用感を得られるためには、きらきら言葉をあえて使ったり、とにかく褒めたりすること、勉強以外のことを評価することが重要。
- 学級担任が、指揮コンダクターして欲しい。リーダーシップを取ることでこども達が育つ。
- 5教科以外の授業の中で充実感を感じられるような授業を行う。
- 教員のスキルを上げ、人数を増やし、先生方のゆとりを増やす

3. 地域

- 地域の行事に参加して、親以外の大人と交流することで社会性を学ぶ。
- 学校内に町会の部屋を設ける。
- 授業で町会活動に参加する。
- 子どもたちがお祭りなど地域の文化を学ぶ。
- 地域と学校が連携し、町会等の介入により子どもたちに社会性を身につけさせる（コミュニティスクール等）→人間関係が作れない
- 昔は、「町会」・「個」・「学校」が一体となっていた。コミュニティの連携が解決策では。
- 昔は「分団」があった。分団対抗の大会があったり、上級生が下級生の面倒をみたりしていた。今は学区が広域化することにより難しくなっている。
- 地域の子ども会では、子どもたちは地域での自分の役割を知っていて、勉強や運動が優秀

- でなくとも、地域が自信を持つ場となっている。学校以外の地域で褒められることも大切。
- こども会が、高校3年生から小学1年生までいるので、高学年から低学年を見守ることができている。この異世代交流を大事にしていきたい。
 - 親が子の情報が知らなさすぎであると思う。家族団らんの時間が取れていないのが原因かと思う。
 - 学校で評価されない子を地域（子供会等）で補完する。
 - 世代間交流
 - スクール児童館に教員が来て子どもを見てもらう等の情報共有があっても良いのでは。

4. 全般

- 目標があれば、それに向かっていくことができ、達成することで肯定的になれる。
- 今回の4つの項目の中では、一番の基盤で意欲やストレスへの耐性につながる。認められる経験の積み重ねが大切。
- 最近のこどもの夢を持つ子が少ない。児童館で夢を聞くと、普通に生きることが夢という子がいるくらいで衝撃を受けた。
- 色々な世代間交流が必要。地域の人と声を掛け合うことで、話すこと・聞くことのコミュニケーション能力向上のために重要。
- 夢を持つことが重要。
- 仕事役割の分担が必要。役割を与えると自分の存在感を感じられる。また、縦割りのつながりが重要。大沼岳陽学園も学年4-3-2としていたが、上手くまわっているようにみえた。
- 自分らの地域から学校がなくなると、人々の心も町も寂れるため、最終的には学校の役割が一番重要。コミュニティースクールを効果的に活用し学校と連携を強化していくことが重要。
- 地域の商店街が少なくなってきたり、子どもたちとの接点が少なくなってきたり

テーマ② ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない

→キーワード：

1. 家庭：外遊び、一家団らん
2. 学校：小中が連携して15歳の目指す姿を小中の先生が同じベクトルを向く、小中が一体となりふるさとむろらんへの愛着と誇りを持つ15歳を育成できる小中学校、小中で「むろらん学」を開設
3. 地域：スクールバスで昔話、地元企業の方が授業、世代間交流、あいさつ、地域の方が学校に入る、体験学習を増やす、地域や企業見学機会の増、コミュニティスクールの早期立ち上げと学校との連携、カルチャーナイト、授業に地域の方を介入させる、子どもたちに地域で良い思い出を作らせ、郷土愛を育む
4. 全般：市外へ出た人がむろらんの良さを言葉で発信してほしい

【課題】・【解決策】

1. 家庭

- 外で遊ばせる→子ども達で勝手に地域の良いところを見つけてくる。地域を知ることができる
- 一度室蘭を離れると良さがわかる。
- 一家団らんの時間を持つ

2. 学校

- 小中9年間、15歳の目指す姿に向けて小中学校の先生たちが同じベクトルを向く
- 小中が一体となり、ふるさと室蘭への愛着と誇りを持つ15歳を育てられる小中学校
- 小中で「むろらん学」を開設

3. 地域

- 例えば、スクールバスの中で、大人が昔話をしてあげる
- 地元企業の方が授業をする
- 世代間交流
- あいさつ
- 空き教室に地域の方が入り、休み時間に遊びに行ける場になれば。地域への愛情や誇りを持つ場ともなり得る。
- 授業のカリキュラムの進行を速め体験学習を増やしたい、そのためには授業を早く進めて時間を作る必要がある。青健協など地域の方に授業に入ってもらいちょっとしたお手伝いをしていただくのも良いのでは。
- 小さな頃から仕事を理解すること。カリキュラムの関係など、今は中々、地域や企業と繋がる時間がない。長期休業を利用するなど、地域や企業を見る機会を増やしては。

- コミュニティスクールを早く立ち上げる必要がある。地域が学校に入っていける。
- 学校だけでは難しいが、地域もあまり期待されても大変。学校のセキュリティ問題等、実際はマッチングが難しい。
- カルチャーナイトの盛況により、地域に愛着がある方はいる。
- 空き教室の利用等により授業に地域の方のを介入させる。
- 後志管内にいた時は、こども達に地域で良い思い出を作らせて、郷土愛を育み人口流失を食い止めている。室蘭はまだそこまできていない。

4. 全般

- 市外へ出て行った人がきちんと室蘭の良さを言葉にして発信して欲しい。市外でに出た人はみな室蘭親善大使！

テーマ③ 不登校児童生徒数が、全国に比べて多い

→キーワード：

1. 家庭：親の相談場所、親へのサポート、多様性を認める、オンラインによる教育、子どもに夢を持たせる
2. 学校：異学年授業交流、小中協力体制、専門性の高い先生を配置、小学校で専門性の高い先生の授業を、小学校で担任以外も子どもたちを見られる環境構築、サポートセンターの役割大事
勉強以外の体験の機会、色々な選択肢を与えられる学校、色々な選択肢を与えられる学校、インクルーシブ教育（お金とマンパワー）、たくさんのめで子どもたちを見守り手をかける、中学校の先生がもっと小学校に入る
3. 地域：叱ることができる社会、町会で保護者の悩み相談（学校や町会館で）、地域での不登校児童生徒の情報共有、あいさつが重要、地域とのつながりで救われる家族もある
4. 全般：企業訪問（社会を知る、学校以外の選択肢の認知）、いろいろなコミュニティや活躍できる場の創出、学校の負担軽減、不登校の追跡調査、多様性、不登校に対する価値観を変える、ネット環境の活用

【課題】・【解決策】

1. 家庭

- 不登校の子だけではなく親の相談できる場所を作る。
- 親へのサポート（くじらんサポートセンター）
- 多様性を認める。
- オンラインによる教育
- 子どもに夢を持たせる

2. 学校

- 異学年の授業に参加し交流を図る。
- 現在よりも、もっと小中学校の先生たちが交流し、手を取り合える小中学校
- 小学校で専門性の高い先生が教えてくれる環境。（授業について行けないことからの不登校対策）
- 小学校では、担任だけでは無く多くの先生たちで子どもたちを見ることができる学校。
- サポートセンターくじらんでの親と子どもへのサポート

- 多くの教職員による子どもへの見守り・サポート指導
- 勉強だけではなく、勉強以外の体験の機会を作る。
- 色々な選択肢を与えられる学校
- インクルーシブの拡大（教員等の研修機会）

- 教員の増（増員により心のゆとりが必要）
- 不登校といじめは相反している。不登校生徒が登校するといじめにあうことが多く、いじめられると不登校になる。これを改善するためには、やはり土台として人間性が重要。
- もう一つ不登校を減らす方法としては、発達障害の生徒が多いため、インクルーシブ教育の拡大が必要。特性を理解することにより確実に不登校は減らせる。ただ、お金とマンパワーが必要なことが課題。
- たくさんの目で見守る、手をかける
- 中学校の先生が、もっと小学校に入った方がよい。

3. 地域

- 叱ることを是とする社会
- 地域の人が地域で授業する。
- 町会で保護者の悩み相談を実施する（学校や町会館で）
- 地域でも不登校の子がいれば声をかけていけるよう情報共有できないか。声をかけるには大人側にも心に余裕が必要。
- 町会等の地域で授業を行ったり保護者の悩み相談を行う。
- 自己有用感と地域への愛情と誇りを持たすことで、自然と不登校・いじめは減少していくと思う。
- 地域の人との交流。町内で大人と子どものあいさつが重要。これができる则ち自分の立ち位置を知ることができるので、いじめ不登校は自然と減っていくと思う。
- 地域とのつながりで救われる家族もある

4. 全般

- 色々な施設に子ども達で行けるような仕組み作りがあれば（例えば、バスのフリーきっぷだったり）
- 例えば、学校に行けないなら、その日は企業に訪問してみても良いのでは（社会を知ることが出来るし、学校以外の選択肢にもなる）。大人は自分の意思で選択できるが、子どもは学校という選択肢しかなく、逃げ場がない（ストレス）。
- いろいろなコミュニティや活躍できる場がたくさんあると良い。子どもにとってチャネルがたくさんあるという状況があれば、学校だけでは無理。学校が背負い込み過ぎて多忙にならないような仕組みが必要。
- 不登校だったが大人になってからは就職しちゃんとやっけていけるなら問題無いのでは。そのために不登校の追跡調査も必要では。基本は登校した方が良いとしても、今は多様性の時代。大検や通信制のN高など可能性は他にもある。寛容になって良いと思う。
- 昔の不登校=引きこもりのイメージから今は少し変わってきている。価値観自体を変える必要がある。今は学び直しができる時代。ネット環境も解決の一つとなる。

テーマ④ いじめの発生が、今も続いている

→キーワード：

1. 家庭：学校と連携し SNS の使い方に目を配る、メディアとの接し方
2. 学校：先生が多く先生が目が行き届いた学校、上級生の見守り、異学年が相談に乗る、意見の相違を認めるような授業、小中の先生たちの交流
3. 地域：コミュニティースクールを土台として学校と連携して登下校時や公園で子どもたちを見守る、地域の中で幼児期から様々な集団で生活する経験
4. 全般：あいさつを教える、色々なコミュニティや活躍できる場の創出

【課題】・【解決策】

1. 家庭

- 保護者が何でも口を出しすぎている
- 学校と連携し、SNS の使い方に目を配る
- メディアとの接し方を大人が学ぶ

2. 学校

- 先生が多くて、登校から下校まで先生が目が行き届いた学校
- 道徳の充実
- 異学年からの相談の日を設ける（同学年には言えないことも、年の離れた学年には言えたりする）
- 上級生が見守る環境
- 授業で考えが違う意見を認めることがいじめ防止への第一歩。これを小中で日々確認でき、小中の先生たちが交流できる学校が良い。

3. 地域

- コミュニティスクールを土台に学校と連携し登下校時や公園で子どもたちを見守る
- 地域の中で、幼児期から様々な集団で生活する経験を増やす。

4. 全般

- 何事もあいさつから始まる。近年は、校区が広がり、スクールバスで通う子どもが増えており、あいさつの機会（地域の人へのあいさつ）も少なくなっている。きちんと教えることが大切。
- 全国的に、色々決められ画一的になりすぎている。もう少し、学校・地域・市教委での裁量をもてれば。
- いろいろなコミュニティや活躍できる場がたくさんあると良い。子どもにとってチャンネルがたくさんあるという状況があれば、学校だけでは無理。学校が背負い込み過ぎて多忙にならないような仕組みが必要。（再掲）

4. 第7回検討委員会振返り資料

A班+B班+C班

テーマ：急がれる4つの中学校区地域室蘭市のこれからの学校の形

目次

1. 協議をする上での各班の特徴等
2. 5つの考え方に関して
3. 白鳥台地区を早急に義務教育学校とするよう検討すべき
[主な理由]
4. 蘭西、蘭中地区
5. 蘭北地区
6. その他の考え方
7. 各班毎の発表内容、意見

1. 協議をする上での各班の特徴等

A班：4つそれぞれの地区の特徴を分析し、5つの考え方を判断。

B班：

- それぞれの地区によって職種が固まっていることに注目し、それぞれに形成されているコミュニティがあり、そこを崩すことは避けたほうが良いという考え。
 - 前提として、今学校のあり方を考えても、この先さらに児童生徒数が減れば次のステップへ行くのか？30年もたてば次の段階がやってくるのでは。
- とりあえず、おこう10年間についてのご意見を伺う

C班：協議の前提として、4～5年、10年後を見据えて学校の適正配置と小中一貫校について検討。

2. 5つの考え方に関して

- スポーツ少年団の観点だと、数が多い方が良い。みなと小が開校した際は、元々4校あった小学校が1つになり、少年団も4つが1つになった。もちろん人数が多くなるのと良い面もあるが、チーム同士の競争がなくなったりするので、数が多い方が活性化する。
(A班)
- 学校が統合されると、長年、その地域で築いてきた文化があるため、混ざり合うのが難しい。地域の家族感が強いので、横の繋がりより(=小小や中中)、縦の繋がり(=小中)の方が良いと思う。(A班)
- 小中一貫は200人以下の児童生徒数で行うべき。人数が多いと子どもの顔も見えない。
(A班)

- 地区、地域という考え方で、4つの地区となっているが、地区によって職種が固まっており、それぞれ形成されているコミュニティがあり、そこを崩すことは避けたほうが良い。(B班)
- 学校づくりについては、4つの地域と他の3つの地域について、児童生徒数や統合の観点からも部活動等に差がでてしまうことが懸念される。(B班)
- 義務教育学校は大きな学校より小さな学校で行う方がスケールメリットがあることを重視すべき。(生徒数の違いにより、先生が一人増えた際の効果に違い)(B班)
- 義務教育学校は適正な人数を下回っている学校でやるからこそメリットがあると思われる。(B班)
- 中学校と小学校のほか、小学校と小学校を1つにするという方法もあるが、小学生はなるべく近くで通える方が良いと思われることから中学校と小学校の方が良い。(B班)
- 50～60人の単体の中学校は学校として存続が難しい。よって、本室蘭中学校・星蘭中学校は、統合か義務教育学校にする必要がある。(C班)
- 適正配置にしる義務教育学校にしる、5～6年後の数値を見ながら検討しなければならない。また地域の理解も必要なため、新しい学校ができるまで、4～5年を要するのでそれに合わせた検討が必要。(C班)
- この地区は義務教育学校、この地区は統合とすると地域の人々の理解が得づらいのでは？(C班)
- 児童生徒数が少ないところから、義務教育学校か統合を検討していくべき。(C班)

3. 白鳥台地区を早急に義務教育学校とするよう検討すべき

[主な理由]

- 義務教育学校と言う特色を出すことにより人が集まり地域の活性化についても期待できる。(A班)
- 小中一貫は200人以下の児童生徒数で行うべき。人数が多いと子どもの顔も見えない。(A班)
- 地区によって職種が固まっており、それぞれ形成されているコミュニティがあり、そこを崩すことは避けたほうが良い。(B班)
- 義務教育学校については、小さく存続が難しい学校のほうがスケールメリットが得られる。白蘭小学校、本室蘭中学校はスケールメリットも大きく、地区割りの変更もないため優先すべき。(B班)
- 学校統合により子どもたちの活動場所が減っていくのでは。少年団や学校開放も満員。スクール児童館もスペースが不足しており、十分な活動ができない場合も。学校の見直しでキャパシティのキープができるのか。(B班)
- 義務教育学校は大きな学校より小さな学校で行う方がスケールメリットがあることを重視すべき。(生徒数の違いにより、先生が一人増えた際の効果に違い)(B班)

- 児童生徒数等を考慮し優先順位をつけ検討した。①白蘭、本室蘭地区、②星蘭中学校地区、③港北地区、④地球岬地区でとりかかかかるべき。(C班)
- 3(白鳥台地区)は児童生徒数の減少が著しいので、早期の義務教育学校での検討が必要
- 50～60人の単体の中学校は学校として存続が難しい。よって、本室蘭中学校・星蘭中学校は、統合か義務教育学校にする必要がある。(C班)
- 白蘭地区については校舎に近いこともあり、優先度が高いと考える。また、モデル校とする案もでた。(C班)

4. 蘭西、蘭中地区

- 「みなと小・室蘭西中」と「地球岬小・星蘭中」を合わせるの、校区も広すぎるし、文化も違うので、どうなのか。(A班)
- みなと小学校と地球岬小学校、西中学校と星蘭中学校を統合する案もあり、学校の活性化や部活動の維持に効果があると考えた。(A班)
- 星蘭中学校については、距離的に考えて西中学校との統合の案もでた。(C班)
- 50～60人の単体の中学校は学校として存続が難しい。よって、本室蘭中学校・星蘭中学校は、統合か義務教育学校にする必要がある。(C班)
- 7・8年後の小中学校の児童生徒数と校舎及び義務教育学校として考えると、1は校舎に入りきれないのでは？ また、1と2は校舎が離れているため難しいのでは？ 34は距離が近く、校舎も入りきれるので義務教育学校としてあり。(C班)
- みなと小・室蘭西中は、児童数が安定しているのでこのままの状態。(C班)
- 地球岬小は、ぎりぎり単体で存続できそうだが、星蘭中学校は室蘭西中学校との統合が必要では？(C班)
- もし地球岬を統合するとしたら校区の再編が必要。スクールバスの関係で、みなと側と海陽側に分けるのもあり。(C班)
- 地球岬小を統合とした場合、みなと小は遠すぎるのでは？(C班)
- 星蘭中と室蘭西中の統合は、徒歩で行けそうなのであり。(C班)

5. 港北地区

- 蘭北中学校と港北中学校については令和15年頃から、地区に学校を残し義務教育学校にするのがよいと考えた。(A班)
- 蘭北小も単体での存続できそうだが、港北中が問題。既にできているであろう白鳥台地区の義務教育学校との統合か？それとも初代義務教育学校の評価を見て、続けそうであれば港北地区も義務教育学校にしても良いのでは？(C班)
- 4も3の義務教育学校の評価を見てからであるが、義務教育学校として検討してもいいのでは？(C班)

6. その他の考え方

- 江別市のように、学校の選択制も案として上がった。
学校に合わなかったら、自由に環境を変えられるようにしてはどうか（区域を選べる自由）。リスタートのチャンスを与えられる。（A班）
- 白鳥台地区の小中一貫校に喜門岱小も加えてはどうか（=小中一貫+特認校）
喜門岱小に通う児童は、中学校になると自分の校区に通うことになり、小規模に慣れていたところに、規模の大きい中学校に通うことになると、中々馴染めない。そういった問題も解消できるのでは。（A班）
- 白蘭地区については校舎が近いこともあり、優先度が高いと考える。また、モデル校とする案もでた。（C班）

7. 各班毎の発表内容等

A班

[発表内容]

●白鳥台地区（+喜門岱小）

- ・白蘭小学校、本室蘭中学校の地区が急いで対応をとるべきであり、また、喜門岱小学校も併せて統合し、引き続き特認校とし、義務教育学校とする案がでました。特色を出すことにより人が集まり地域の活性化についても期待できる。

●蘭北地区

- ・蘭北中学校と港北中学校については令和15年頃から、地区に学校を残し義務教育学校にするのがよいと考えた。

●蘭西、蘭中地区

- ・みなと小学校と地球岬小学校、西中学校と星蘭中学校を統合する案もあり、学校の活性化や部活動の維持に効果があると考えた。

●その他（学校選択制）

- ・江別市のように、学校の実験制も案として上がった。

[主な意見]

●活動場所（スポーツ少年団）

スポーツ少年団の観点だと、数が多い方がよい。みなと小が開校した際は、元々4校あった小学校が1つになり、少年団も4つが1つになった。もちろん人数が多くなるのと良い面もあるが、チーム同士の競争がなくなったりするので、数が多い方が活性化する。

●小中一体全般

学校が統合されると、長年、その地域で築いてきた文化があるため、混ざり合うのが難しい。地域の家族感が強いので、横の繋がりより（＝小小や中中）、縦の繋がり（＝小中）の方が良いと思う。

●蘭西、蘭中地区

「みなと小・室蘭西中」と「地球岬小・星蘭中」を合わせるのは、校区も広すぎるし、文化も違うので、どうなのか。

●小中一体全般

小中一貫は200人以下の児童生徒数で行うべき。人数が多いと子どもの顔も見えない。

●その他（学校選択制）

学校に合わなかったら、自由に環境を変えられるようにしてはどうか（区域を選べる自由）。リスタートのチャンスを与えられる。

●白鳥台地区（+喜門岱小）

白鳥台地区の小中一貫校に喜門岱小も加えてはどうか（＝小中一貫+特認校）

喜門岱小に通う児童は、中学校になると自分の校区に通うことになり、小規模に慣れてい

たところに、規模の大きい中学校に通うことになる、中々馴染めない。そういった問題も解消できるのでは。

2. B班

[発表内容]

- 5つの考え方（考え方の前提）
 - ・ B班は4つの地区に限らず室蘭全体で考えた。
 - ・ 地区、地域という考え方で、4つの地区となっているが、地区によって職種が固まっており、それぞれ形成されているコミュニティがあり、そこを崩すことは避けたほうが良い。
- 部活動（地域格差）
 - ・ 学校づくりについては、4つの地域と他の3つの地域について、児童生徒数や統合の観点からも部活動等に差がでてしまうことが懸念される。
- 白鳥台地区
 - ・ 義務教育学校については、小さく存続が難しい学校のほうがスケールメリットが得られる。白蘭小学校、本室蘭中学校はスケールメリットも大きく、地区割りの変更もないため優先すべき。

[主な意見]

- ①地域という考え方
 - ・ みなと小・室蘭西中地区→造船業
 - ・ 地球岬小・星蘭中地区→製鉄・製鋼業
 - ・ 蘭北小・港北中地区→港湾業
 - ・ 白蘭小・本室蘭中地区→ニュータウンそれぞれのコミュニティで形成された人間関係があり、それを崩さず維持するなどの考慮も必要。
- ②活動場所（部活動（少年団）、スクール児童館）

今回議論対象の「急がれる4つの地域」と残りの「3つの地域」に格差が生じないか懸念

 - ・ 部活の有無→国で部活を地域に移行するという考えが示されており、現在検討中。
 - ・ 学校統合により子どもたちの活動場所が減っていくのでは。少年団や学校開放も満員。スクール児童館もスペースが不足しており、十分な活動ができない場合も。学校の見直しでキャパシティのキープができるのか。
 - ・ 部活動が維持できない場合は、部活動の競技毎に場所を決めて統合していくことも検討したほうが良いのでは。
- ③小中一体全般

義務教育学校は大きな学校より小さな学校で行う方がスケールメリットがあることを重視すべき。（生徒数の違いにより、先生が一人増えた際の効果に違い）

・今学校のあり方を考えても、この先さらに児童生徒数が減れば次のステップへ行くのか？30年もたてば次の段階がやってくるのでは。

→とりあえず、おこう10年間についてご意見を頂きたい。

・教員の働き方が改善されることが重要。規模の大きな学校では教員の負担もさほど変わらないのでは。小さい学校からケーススタディとして始めるのが良いのでは。

→校長先生等が一人で良くなるため、その分他の教員が増員できる。

・義務教育学校は適正な人数を下回っている学校でやるからこそメリットがあると思われる。

・中学校と小学校のほか、小学校と小学校を1つにするという方法もあるが、小学生はなるべく近くで通える方が良いと思われることから中学校と小学校の方が良い。

・小中一貫を推進していく場合に桜蘭中学校等の生徒数の多い学校については検討が必要。

[まとめ]

①～③から、白蘭小と本室蘭中は、地域性を崩さず、無理に遠くから登校する必要も無い等、義務教育学校にすることのメリットが大きい地域と考えられる。

3. C班

[発表内容]

●検討の前提

・4～5年、10年後を見据えて学校の適正配置と小中一貫校について検討した。

●小中一体全般

・児童生徒数等を考慮し優先順位をつけ検討した。①白蘭、本室蘭地区、②星蘭中学校地区、③港北地区、④地球岬地区でとりかかるとのべき。

●白鳥台地区

・白蘭地区については校舎が近いこともあり、優先度が高いと考える。また、モデル校とする案もでた。

●蘭西、蘭中地区

・星蘭中学校については、距離的に考えて西中学校との統合の案もでた。

[主な意見]

●小中一体全般

・50～60人の単体の中学校は学校として存続が難しい。よって、本室蘭中学校・星蘭中学校は、統合か義務教育学校にする必要がある。

・7・8年後の小中学校の児童生徒数と校舎及び義務教育学校として考えると、1は校舎に入りきらないのでは？ また、1と2は校舎が離れているため難しいのでは？ 34は

距離が近く、校舎も入りきれるので義務教育学校としてあり。

●白鳥台地区

- ・児童生徒数を鑑み、まずは3白鳥台地区は、義務教育学校にするのが良い。

●蘭西地区

- ・みなと小・室蘭西中は、児童数が安定しているのでこのままの状態。

●蘭中地区

- ・地球岬小は、ぎりぎり単体で存続できそうだが、星蘭中学校は室蘭西中学校との統合が必要では？
- ・もし地球岬を統合するとしたら校区の再編が必要。スクールバスの関係で、みなと側と海陽側に分けるのもあり。

●蘭北地区

- ・蘭北小も単体での存続できそうだが、港北中が問題。既にできているであろう白鳥台地区の義務教育学校との統合か？それとも初代義務教育学校の評価を見て、続けそうであれば港北地区も義務教育学校にしても良いのでは？

(以上 秦校長)

●協議の前提

- ・適正配置にしる義務教育学校にしる、5～6年後の数値を見ながら検討しなければならぬ。また地域の理解も必要なため、新しい学校ができるまで、4～5年を要するのでそれに合わせた検討が必要。

●白鳥台地区

- ・3は児童生徒数の減少が著しいので、早期の義務教育学校での検討が必要

●蘭北地区

- ・4も3の義務教育学校の評価を見てからであるが、義務教育学校として検討してもいいのでは？

●蘭中地区

- ・2の地区みなと小や室蘭西中と統合でなく、義務教育学校として検討してもいいのでは？

(以上 今泉委員)

●5つの考え方について

- ・この地区は義務教育学校、この地区は統合とすると地域の人々の理解が得づらいのでは？

●小中一体全般

- ・児童生徒数が少ないところから、義務教育学校か統合を検討していくべき。

●蘭中地区

- ・地球岬小を統合とした場合、みなと小は遠すぎるのでは？

●蘭西、蘭中地区

- ・星蘭中と室蘭西中の統合は、徒歩で行けそうなのであり。

(以上 齋藤委員)

これからの学校づくり検討委員会 報告書（案）

令和4年8月4日

1 検討の動機

平成15年4月の東園小学校と大和小学校の統合による海陽小学校の新設でスタートした学校適正配置計画が、令和3年4月の天沢小学校の地球岬小学校への編入統合により終了したが、その間、室蘭市の児童生徒は約2,400名減少し、適正配置計画で目指した12学級以上を維持できない学校が増え、学校の小規模化が進む一方、児童生徒数が増加傾向の学校があるほか、現在の学校教育が抱える課題は多く、本市では、どのような学校づくりを目指すべきであるのかなど、市教委からの申入れにより学校のあり方について検討した。

2 本市の学校教育を取り巻く課題

本市の学校教育において、次のような課題があることを市教委からの説明により認識した。

- (1) 不登校児童生徒が全国平均より高い状況が続いている。
- (2) いじめの認知件数は減少傾向であるが、いじめの発生が続いている。
- (3) 「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない。
- (4) ふるさと室蘭に愛着をもつ子どもが少ない。
- (5) 学力が全国平均よりも低い傾向がある（特に算数、数学）
- (6) 小学校2校、中学校で6校が適正規模を維持できていない。また、今後、一部の地域を除き、更に厳しい状況になることが予想される。

3 これまでの検討委員会開催内容等

回数等	開催日／場所	検討項目等
第1回	令和3年11月26日（金） ／旭ヶ丘小学校	・市教委説明（これまでの経過、新たな課題等） ・意見交換
第2回	令和4年 3月24日（木） ／桜蘭中学校	・市教委報告（不登校・いじめの状況等、小中一貫校視察） ・北海道教育庁胆振教育局教育支援課長講話 ・意見交換
第3回	令和4年 4月27日（水） ／翔陽中学校	・意見交換（ワークショップ） テーマ1：「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない テーマ2：ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない
第4回	令和4年 5月19日（木） ／海陽小学校	・意見交換（ワークショップ） テーマ3：不登校児童生徒が、全国に比べて多い テーマ4：いじめの発生が、今も続いている
先進校視察	令和4年 5月23日（月） ／七飯町立大沼岳陽学校	・10：30から12：00まで 授業参観及び構内見学、質疑応答等

回数等	開催日／場所	検討項目等
第5回	令和4年 6月 2日(木) ／海陽小学校	・意見交換(ワークショップ) テーマ:第3回、第4回の協議を踏まえた、これからの室蘭市における学校教育の方法の協議・検討 ・検討委員報告(小中一貫校視察)
第6回	令和4年 6月30日(木) ／海陽小学校	・市教委説明(第3回～第5回の協議内容を踏まえた、室蘭市のこれからの学校教育に求められるもの) ・意見交換
第7回	令和4年 7月15日(金) ／海陽小学校	・意見交換(ワークショップ) テーマ:室蘭市のこれからの学校の形
第8回	令和4年 8月 4日(木) ／室蘭市役所	・市教委からの説明(報告書案について) ・意見交換(報告書案の検討)

4 課題の解消に向けた学校づくりの方向性

学校づくりの方向性について、多くの意見がある中で次のとおり意見をまとめた。

- (1) 課題解消に向けて次の2つの教育を目指すことが、室蘭市のこれからの学校づくりの方向性として必要である。
 - ア 小学校と中学校がより強く連携した教育(一体となった教育)
 - イ 家庭、地域が参画して学校とより強く連携した教育(一体となった教育)
- (2) 上記の方向性を実現するためには、コミュニティ・スクールの設置や機能の活性化等による、室蘭市全体での小中9年間の一体となった教育(小中一体教育)を目指す必要がある。

5 これからの学校の形

学校づくりの方向性を踏まえ、これからの学校の形について、次の5つの考え方を踏まえて検討した。

- (1) これまでの適正配置の考え方(適正規模12～18学級)
- (2) 新しい学校の考え方(義務教育学校など)
- (3) 現状維持の考え方(今の学校数、形態のまま教育を進める)
- (4) 1つの考え方に縛られずに、地域の実情等に合わせた柔軟な考え方(ハイブリッドな考え方)
- (5) その他の考え方(校区の変更、校区を無くすなど)

6 児童生徒が減少する地域

児童生徒が減少する地域については、その他の地域と比べて子どもたちの教育環境の整備を急ぐことが必要と考えられ、地域ごとに次のような考え方がある。

- (1) **白鳥台地区** この地域は、特に児童生徒が減少している地域であり、さらに、他の地域からの距離を考えた場合、これまでの「適正配置」の考え方ではなく、本室蘭中学校と白蘭小学校を1つにした、新たな考え方の「義務教

育学校」の検討を進めると良いと考えられる。

また、室蘭市の小中一体教育を推進するため、他の地域よりも子どもの減少が進むこの地域で、室蘭市のモデル校として、いち早く取組むことも考えられる。

- (2) **蘭中・蘭西地区** この地域も児童生徒が減少しており、地区ごとに小中一体となった、新しい「義務教育学校」の検討をする考え方もあるが、これまでの「学校適正配置」の考え方により、一定期間、適正規模が維持できることや、新設後間もない校舎があることなども踏まえ、更に検討をしていくと良いと考えられる。
- (3) **港北地区** この地域も児童生徒が減少しており、将来的には、新しい「義務教育学校」の形も想定されるが、蘭北小学校で適正規模が維持できる期間があるほか、他の地域の宅地造成の動向等も想定しつつ、更に検討をしていくと良いと考えられる。

7 児童生徒数が維持される地域

当面、児童生徒数が微増、維持される地域である、桜蘭中学校区（旭ヶ丘小、八丁平小）、東明中学校区（天神小）、翔陽中学校区（海陽小）については、中学校区ごとのコミュニティ・スクールを活性化させて、小中一体となった教育、地域と一体となった教育を進めていくと良いと考えられる。

将来的には、これらの地域についても、児童生徒数の推移、校舎の老朽化などを踏まえ、新しい「義務教育学校」、これまでの「学校適正配置」の考え方など、状況に応じたより良い教育環境の検討が必要と考える。

8 その他の考え方

- (1) 不登校、いじめへの対応の考え方として、不登校となった子どもが、室蘭の学校で再スタートするためには、校区にとらわれない学校、選択できる学校があっても良いとの意見があった。
- (2) 現在、特認校は喜門岱小学校のみであり、中学校は居住地校区の学校に進学するしかないため、中学校に馴染めずに不登校となることも想定されることから、中学校の特認校があった方が良いとの意見があった。

9 まとめ

児童生徒が減少する地域については、できるだけ早く、市教委としての方針を取りまとめることが重要と考える。

特に、白鳥台地区は、児童生徒の減少が他の地域よりも顕著であり、さらに、前述した「義務教育学校」の検討を進めること等により、これまでと違った子どもたちのための教育環境の整備に繋がると考えることから、早急に検討を進めるべきと考える。

その他の地域についても、児童生徒数の推移等を見据え、地域の意見を聞きながら、市教委としての考え方をとりまとめ、将来的にモデル校等の状況に対応できる柔軟性をもった方向性を検討すべきと考えられる。

これまで8回に渡り開催してきた「室蘭市これからの学校づくり検討委員会」

においては、室蘭市における学校教育の課題の解決に向けた、これからの学校づくりの方向性について、ワークショップや視察などを通じて、地域、保護者、学校、スポーツ、社会教育、青少年健全育成、学識経験など、様々な分野の委員の意見を取りまとめたものである。

「室蘭市これからの学校づくり検討委員会」の検討に参加した委員名（敬称略）

若佐 誠（室蘭市PTA連合会会長）、池田 陽祐^{※1}（室蘭市PTA連合会（白蘭小））、長利 利恵（室蘭市PTA連合会（地球岬小））、佐野 かおり（室蘭市私立幼稚園PTA連合会会長）、秦 将人（室蘭市立桜蘭中学校校長）、高橋 泰明（室蘭市立東明中学校校長）、大須賀 圭（室蘭市立海陽小学校校長）、鷺津 和司（スクール児童館運営事業者）、齋藤 宏（同左）、森川 卓也（室蘭市町内会連合会副会長）、田村 博文（室蘭市町内会連合会常任理事）、菊地 明（室蘭市青少年健全育成推進協議会会長）、中村 恭子（室蘭市青少年健全育成推進協議会事務局長）、石井 裕子（室蘭市社会教育委員の会委員）、加地 明^{※2}（一般財団法人室蘭市スポーツ協会事務局次長）、山田 一正（室蘭商工会議所専務理事）、真境名 達哉（室蘭工業大学准教授）、今泉 勁介（学校づくり有識者）、伊藤 博明^{※3}（室蘭市教育委員会教育長）

※1）第4回より、金丸 陽子（室蘭市PTA連合会（白蘭小））から池田 陽祐（同左）へ交代

※2）第7回より、大平 朋美（一般財団法人室蘭市スポーツ協会課長）から加地 明（同協会事務局次長）へ交代

※3）第3回より、國枝 信（室蘭市教育委員会教育長）から伊藤 博明（同左）へ交代